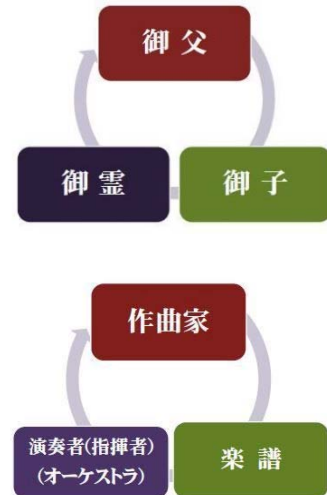


第 26 回目 多様性における一致

はじめに

●前回は「御霊の一致を熱心に保つ」というタイトルでした。神様の壮大なヴィジョン、神様の夢はキリストにあってすべてのものが一つになることです。その夢はすでに作品として出来上がっています。音楽(特に、シンフォニー)に例えるならば、神の作品はすでに出来上がっています。それを演奏するための楽譜もすでにあります。そして優秀な指揮者も立てられています。ただ、今必要なことは、その指揮者に従ってオーケストラのメンバーが演奏することです。ところが、問題は演奏者である私たちが指揮者に従わないで、それぞれ勝手に、勝手な解釈で演奏しようとする可能性があるということです。もしそうだとしたら、どんな演奏になることでしょうか。聞くに堪えないものとなることは明らかです。



●きちんと、指揮者である聖霊様の言われるとおりに、その指示にしたがって演奏するならば、指揮者は楽譜(キリスト)の中に現わされた作曲家(御父)の意図した音楽を奏することができるはずですが。そのためにも私たちは指揮者に従う必要があります。このことが「御霊の一致を熱心に保つ」ということです。御霊によって奏でられる一致の祝福を熱心に保つことが求められています。そのための秘訣として、パウロが最初に取り上げたことは、「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれる」ことでした。これらはすべてイエス・キリストのうちに見られるものです。これらの徳がキリストのからだの中に現わされるように指揮者は導かれます。私たちが「召された者としてふさわしく歩む」ために、指揮者である聖霊様に熱心に真剣に従うことが大切です。でなければ、素晴らしい演奏を奏することはできません。

1. 教会の「ひとつ性」の認識・・・共通するもの

●さて今回は、さらに「一致を保つため」の大切なことについてパウロは教えようとしています。タイトルを「多様性における一致」としましたが、内容的には「一致を保つ」ために、共通点と相違点は何か、特に相違点をどのように受けとめ、また全体がどこに向かっていくのか、という点です。パウロの教会観は、エペソ書だけでなく、ローマ書にも、コリント書にも示されていますが、常に語られていることは、「キリストのからだとしての教会」における「一致」と「多様性」と「成長」です。常に、この順序に従って書かれています。まずは、聖書を読んでみましょう。



## אגרת שאול אל האפסים

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 4章 3~6節

3 . . . 御霊の一致を熱心に保ちなさい。

4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。

5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。

6 すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。

●ここでは「一つ」ということが強調されています。それは 一致を保つための「一つ」であり、すべてに共通する「一つ性」です。ある牧師が「北海道にはいくつの教会がありますか」という質問をしました。みなさんなら何と答えるでしょうか。砂川市にはいくつ？ 滝川市にはいくつ？ . . . 答えは「一つ」です。

世界中にいくつの教会があるかと問われるならば、聖書に従えば、「一つ」しかありません。一つの頭に多くの体があればそれは奇怪な化け物です。一つの頭には一つのからだしかないように、ひとりのキリストという「かしら」につく「からだ」はひとつしかあり得ないということが、ここで浮き彫りにされています。

●「からだ」だけでなく、「御霊は一つ」「望みも一つ」そして、「主も一つ」です。「船頭多くして船山に上る」という諺があります。船頭が多すぎると指図が一つにまとまらず、船はとんでもないところに行ってしまうということのたとえです。英語圏では、料理人が多すぎて、スープの味をだめにするという言い方になるようです。

●また「信仰も一つ」です。私たちの前に見えるように現わされた神の御子イエス・キリストを信じることなくして、御父である神も聖霊なる神も知ることはできません。「いわしの頭も信心から」ではありません。はっきりとイエス・キリストを信じる信仰がなければ、私たちはキリストのからだに属することはできませんし、神とのかかわりをもつことができません。何の役にも立たない「いわしの頭」を信じる「信心」が大切なのではなく、何を、いや、誰を信じるか、その対象が大切で、教会は「いわしの頭」ではなく、神の御子イエス・キリストを信じる信仰によって一つなのです。

●「バプテスマ」も一つです。「バプテスマ(洗礼)」のやり方はいろいろあります。滴礼、浸礼、場所も川、海、教会、銭湯、病床とさまざまですが、父と子と聖霊との名において授けられる洗礼は共通しています。「父と子と聖霊の御名によって」と言いますが、正しくは「父と子と聖霊のうちに」です。つまり、三位一体の神の愛の交わりの中に子として生まれ変わる(=新しく造られる)ことを洗礼と言います。ですから、洗礼は一回限りです。教会は、ユダヤ人であろうと、異邦人であろうと、父と子と聖霊との御名の交わりの中に招かれた者たちによって構成されているのです。

●「すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです」。これはなんと美しい表現でしょうか。ちなみに、これと似た表現が他にもあります。「すべてのことが、神から発し(始まり)、神によって成り、神に至る。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」 . . . どこかで聞いたことがありませんか。そうです。私たちが賛美している曲の一節です。これはローマ書 11章 36節のみことばです。私たちは「すべてのことが神からはじまる。そして神により、神へと至る」というふうに賛美しています。

●いつの時代にあっても、また世界各地にある教会でも、共通していることに目を留めなければなりません。私たちはどうしても他者との「違い」に目が行ってしまいやすい傾向があります。「違い」を強調することで、「一致を保つ」ことが難しくなるのです。プロテスタント教会はある意味で一致崩壊の歴史と言えます。それぞれが自分たちの教理、教義等の「違い」を強調することによって「隔ての壁」を作ってしまった感があります。礼拝のスタイルに違いがあります。賛美歌にも、演奏する楽器やその編成にも違いがあります。洗礼式や聖餐式のスタイルの違いもあります。教会の行政のやり方にも違いがあります。違いをあげたらきりがありません。「違い」があつてしかるべきです。しかし大切なのは、「共通」の土台は何かということです。いつもそこに目が行くようにする必要があります。自分と他者に共通するものはなにか、それぞれの教会に共通しているものは何かを知ることです。

●パウロは共通するものとして、「からだ」「御霊」「召しの望み」「主」「信仰」「バプテスマ」、そして「父なる神」を挙げています。特に、これらの中に「三位一体の神」が挙げられていることが重要です。なぜ私たちはエホバの証人(ものみの塔)と一致できないのか、それは彼らが三位一体の神という土台をもっていないからです。彼らはイエス・キリストおよび聖霊を神のような存在としているからです。「神のような存在」ではなく、「神そのもの」です。この共通認識がないゆえに、異端としているわけです。

一致の土台(共通する土台)	
(1) からだ	(2) 御霊
(3) 望み	(4) 主
(5) 信仰	(6) バプテスマ
(7) 父なる神	

## 2. キリストのからだにおける多様性

●以上、キリストのからだの「一つ性」ということをお話ししましたが、もうひとつ、「御霊の一致を保つ」ために大切なことがあります。それは、キリストのからだの働きの多様性ということです。4章7節を見てみましょう。そこには、「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」とあります。「私たちはひとりひとり」という言い方で、「キリストの賜物の測りに従って恵みを与えられました」ということが述べられています。「ひとりひとりに与えられた恵み」とは何なのでしょう。それは「**御霊の賜物**」のことです。パウロはこの「御霊の賜物」について無知であってはならないと語っています(参照、Iコリント12:1)。エペソ書4章だけでなく、Iコリント12章、ローマ書12章でもそのことを扱っています。

Iコリント12章4~7節

4 さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。5 奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。6 働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。7 しかし、みな益となるために、おのおのに**御霊の現われ**が与えられているのです。

●ここではっきりとしていることをまとめてみましょう。

- ① 「御霊の賜物」は、「御霊の現われ」とも言う。
- ② 「御霊の賜物」とは、「奉仕」「働き」の種類に関する事柄です。
- ③ 信者のおのおの(ひとりひとりに)例外なく与えられています。
- ④ その目的は「みな益となるため」です。つまり、キリストのからだを建て上げるための働きです。

## אגרת שאול אל האפסים

- 特に、④のことはエペソ書 4 章 12 節では次のように記されています。

「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるため」とあります。—「それは」とは、教会を建て上げるための御霊の賜物の中の、特にからだの背骨に当たる部分を担う働きで、「みことばの奉仕」にかかわる賜物のことを意味しています。それは、「**キリストの賜物の測りに従って与えられた恵み**」(7 節)だとあります。それは、いわば「**戦利品の分け前**」とも言えます。これについては少々説明が要ります。

【新改訳改訂第 3 版】エペソ書 4 章 7～10 節

7 しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。

8 そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」

9 —この「上られた」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。

10 この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです——

- 8 節の「高い所に・・・」は、詩篇 68 篇 18 節からの引用です。

【新改訳改訂第 3 版】

あなたは、いと高き所に上り、捕らわれた者を取りこにし、人々から、みつぎを受けられました。頑迷な者どもからさえも、神であられる主が、そこに住まわれるために。

●詩篇 68 篇 18 節には、主がいと高き所に上られたこと、人々から(頑迷な者どもからも)みつぎを受けられたこと、その目的は「神であられる主が、そこに住まわれるために」とあります。そもそも詩篇 68 篇は敵に対する主の勝利が歌われている詩篇です。かつてイスラエルの民は主によってエジプトから解放された際に、多くの金銀など、高価なものをエジプトからはぎ取りました。それはやがて主が彼らと共に住むための「聖所」(=モーセの幕屋)を建造する際に必要なものでした。また、ダビデが全イスラエルの王となり、全イスラエルを統一したとき、それまでペリシテに奪われていた契約の箱をエルサレムに運び、ダビデの幕屋を設けました。しかしダビデの思いとしては幕屋ではなく、壮大な神殿を建てたいという志がありましたが、その資金のすべてはダビデが周囲の敵に勝利して得たものであり、モーセの幕屋の時と同様に、ダビデの志を理解したイスラエルの民からのささげものによってすべてが満たされました。しかし、今や、キリストは復活・昇天した折に、多くの捕虜を引き連れ(つまり、戦利品を手にし)、それを主の召しにあずかった人々に上からの賜物として分け与えられたのです。その目的はキリストのからだなる教会を建て上げるためであり、そして「**みな**の益となるため」なのです。

●いずれにしても、主の宮(神殿)でもある「キリストのからだ」を建て上げるために必要な力、不可欠な力がからだを構成するひとりひとりに与えられているということです。そのひとつひとつの働きは実に多様です。エペソ書では、からだの主要な部分の賜物しか挙げられていませんが、コリント書(12 章)では「**知恵のことば**」「**知識のことば**」「**信仰の賜物**」「**いやしの賜物**」「**奇蹟を行う賜物**」「**預言の賜物**」「**霊を見分ける賜物**」「**異言の賜物**」「**異言を解き明かす賜物**」が挙げられています。その「賜物」はすべて御霊の「力の現われ」なのです。

●福音書の中に「中風の人

## אגרת שאול אל האפסים

屋根を修繕する)の四つの賜物が組み合わされているのを見ることができます。ましてや、教会の様々な働きのためには多くの賜物が組み合う必要があります。ひとつの賜物だけでは何もすることができないのです。

●パウロはエペソ書で、多くの御霊の賜物の中から、とりわけある種の賜物だけをここに取り上げています(4:11)。それは「使徒」「預言者」「伝道者」「牧師+教師」です。それらの賜物に共通している役割は大きく二つあります。

- (1) みことばに直接かかわる働きであるということ
- (2) 「聖徒たちを整えて、キリストのからだを建て上げる」という働きであること

●みことばに直接かかわる働き—これには訓練(熟練)を要します。普通、教会ではこの働きに就く者たちを「教職者」「教役者」、あるいは狭義の意味で「献身者」という言い方をしています。からだでいうならば、背骨の部分を担当する働きです。背骨がなければからだとして動かし、働いたりすることはできません。この働きは終身職です。私たちはこうした働きに一生をかける人を教会として支えていく責任があります。これは大切な教会としてのわざです。このことをないがしろにするなら、主からの霊的な益を受けることができません。みことばにかかわる働きに召された者も、「熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励まなければなりません(Ⅱテモテ 2:15)。

●もうひとつの役割は、「聖徒たちを整えて、キリストのからだを建て上げる」というものです。ここで「聖徒たちを整える」とはどういうことでしょうか。「聖徒たち」とは、イエシュアをキリストと信じた人々のことです。それを「整える」とはどういうことでしょうか。原文では「整える」という動詞ではなく、「整えのため」という名詞の「カタルティスモス」(καταρτισμός)に、「~のために」という前置詞の「プロス」(πρός)が使われています。動詞の「カタルティゾー」(καταρτίζω)には以下のような意味があります。

- ① 破れを繕うという意味・・・〔修正、回復〕
- ② 不足を補い、訓練するという意味・・・〔供給、補充〕
- ③ 強く結び合わせるという意味・・・〔結合、結束〕

●ここにあげられている賜物は、教会のからだに与えられているさまざまな賜物を愛によって結び合わせ、平和のうちに強く組み合わせ、整理し、組織づけ、秩序づけることによってからだ全体を建て上げていく働きであると信じます。したがって、「コーチ」としての働きと言うよりも、「コーディネーター」としての働きの面が強調されているように思います。そのようにして目指すべき一致は、4章13～15節なのです。

【新改訳改訂第3版】エペソ書 4章13～15節

13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。

14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたそざれたりすることがなく、

15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。